

## 第4回

# 女性医療フォーラム

## —働く女性を社会の活力に— 開催報告

平成19年2月10日和歌山市にて、(独)労働者健康福祉機構ならびに和歌山労災病院主催の第4回「女性医療フォーラム」が開催されました。これまで過去3回のフォーラムでは、「女性外来の実践報告」や「性差医療の歴史と現状」などを主なテーマとして実施してきましたが、今回はさらに一步踏み込み「働く女性が社会で目指すべき理想像、果たすべき役割を全うするための健康づくり」という観点から、特別講演、研究報告そしてパネルディスカッションが行われました。会場には、関係者をはじめ、一般市民、働く女性、女性従業員の多い事業所の幹部、医療の現場を目指す学生などが集い、大いに盛り上がりました。

### 女性の活力を社会の活力に

今回の女性医療フォーラムは、労働省(当時)の職業能力開発局海外協力課長として、さらに国連公使として、その後は社会的責任を実践する企業の先駆けThe Body Shop Japanの創業社長として実業界でも活躍された、木全ミツ氏の特別講演で幕を開けました。現在、NPO法人女子教育奨励会理事長を務める木全氏は「現在の日本では能力の高い女性が育っているにもかかわらず、政治、財界、行政どの分野でも政策決定の場に参画している女性の割合が世界の現状と比べると非常に少ない」と指摘。さらにこのような現状を変えるためには、女性自身が「自分の人生を自分で生きる」という自覚を持ち実践すること、自分や企業の利益のためだけでなく、日本、アジア、そして世界を視野に入れつつ社会へ還元する働きが重要で、そうした女性が社会を変えることができるかと力強く述べられました。

「女性の力を生かすことが社会の活性化につながる」と、ときにユーモアも交えながら軽やかに語る木全氏のメッセージは、まさに他に先駆けて「女性外来」を設置し、働く女性をサポートしてきた労災病院グループの姿勢と重なり

ます。今回の特別講演は、女性医療フォーラムが、全人的な存在としての女性を考える“女性学”のフォーラムへと発展する可能性を感じさせるものでもありました。

### 女性の健康を支える現場から

特別講演に続いては「現場からの女性の健康」と題して、3題の研究発表がありました。愛媛労災病院の宮内文久医師(囲み参照)に続いて、六本木ヒルズ内のクリニックの内科医でもある荒木労働衛生コンサルタント事務所所長、荒木葉子先生が「働く女性のがん検診」と題して、近年罹患率が急増している乳がん、子宮頸がん・体がんの検診実施および受検の実態について発表されました。日本では2000年ごろから知られるようになったピンクリボン運動(乳がんの早期発見、早期診断などの啓発活動)などの成果から、乳がん検診の重要性やマンモグラフィーなどの認知率は高まっています。しかし、乳がん、子宮がん検診が職域の検診に含まれる例は少ないため、女性が自発的に思い立つまで受検は行われることはありません。しかもコストは個人的に負担しなければならない場合がほとんどです。乳がん、子宮がん検診を受けない理由としては、羞恥心、



木全ミツNPO法人女子教育奨励会理事長

検診時に受ける痛み、時間がない、どの施設に行けばよいのかわからないなどが障害となっていることがわかりました。女性が健康を維持し、長く社会で活躍するためには、がん検診は重要であり職域での実施も望まれています。広範囲にわたる実施については、法律、コストなど乗り越えるべきものも多いことが指摘されました。

研究発表の3題目は、国立病院機構関門医療センターの女性総合診療チーム、早野智子先生が「女性総合診療便り 診察室の4年間から」と題して発表。特に、ライフイベント(仕事の変化、親の介護、家族の病気、子どもの就職や結婚など)が女性の不定愁訴や疾患の引き金となることを、50代女性の実例を挙げて説明されました。これらに対応するために、医師、臨床心理士、ソーシャルワーカーらが連携した診療を実践されており、受診した患者様からは、高い評価(初診直後の満足度87%以上)を得ているとのことでした。



(写真左から) 星野寛美医師 (関東労災病院)、宮内文久医師 (愛媛労災病院)、早野智子先生 (国立病院機構関門医療センター)、荒木葉子先生 (荒木労働衛生コンサルタント事務所)、上條美樹子医師 (中部労災病院)

### 主体的に自分の健康を維持する

パネルディスカッションは、座長の中部労災病院、上條美樹子医師の「働く女性の健康の危機とは」という呼びかけで始まりました。関東労災病院の星野寛美医師は「自分の力量を超える仕事に直面すると、ストレスを受けて体調を崩す例が見受けられる」と発言。宮内医師も「3つのきっかけがある」とこれを受けました。責任感が増すこと(真面目に取り組みすぎてしまう)、会話がなくなること(子どもが巣立ったあと夫婦の会話がなくなる、職場でのコミュニケーション不在など)、そしてささいな病気によって自分は健康だという自信が崩れたときが危ないそうです。早野先生は、女性の健康維持に対する心理面、社会面でのサポートの重要性にあらためて触れ、ご自身の診療科で、ソーシャルワーカーを増員したことを報告されました。

また、荒木先生が「昇進がストレスになるのは、日本社会では、強い意志をもって職業を選択することが少ないためではないか。そのため過剰に適応しようと無理をしたり、ほめられなくて落胆することの繰り返しが生じる」という視点を提示され、これには会場の参加者も大きくうなずきました。特別講演で木全氏が述べられたよ

うに、健康をつくり上げ、維持するためには「主体的であること」がキーワードになるようです。

「女性が責任を持って自分の心と体のリスクを考え、主体的に検診を受けるなどの行動を起こすこと。それが女性の活力を社会に生かすことになり、ひいては社会全体の健康につながる」との座長のまとめに、大きな拍手が沸きました。

### フォーラムの締めくくり

閉会のあいさつで和歌山労災病院の玉置哲也院長は「当初のフォーラムでは、女性外来の設置と運営に関する検討が主なトピックスでしたが、回を重ねるごとに“働く女性のQuality of Working Life”



玉置哲也 和歌山労災病院院長

へとフォーカスされてきました。今回は、女性が働きながら健康を維持し、国内

外の社会に貢献するという一貫したテーマが多角的に語られました。ご登壇の皆様にご感謝いたします」と述べました。また玉置院長は、女性の力が十分に発揮される社会を支えるために女性の健康の実現に寄与することは、労災病院グループの使命のひとつであり、これからの日本社会の重要なテーマであることにも触れ、フォーラムを締めくくりました。

関原久彦総括研究ディレクターは、「第1回目のフォーラムで、会場から“女性の健康問題から女性のあるべき姿”を考えるレベルにまで高めて欲しいというご意見をいただきました。皆さまのご尽力で、それが達成できつつあることをうれしく思います。また、研究発表では、研究者のみならず被験者の方々の貢献によって新しい知見につながるデータが得られたことも、深く感謝いたします」と述べ、第4回女性医療フォーラムを総括しました。



関原久彦 総括研究ディレクター

今回は、平成19年11月に名古屋市にて開催予定です。多くの皆様の御参加をお待ちしております。

### 研究報告

#### 女性の深夜・長時間労働が精神のおよび内分泌環境に及ぼす影響に関する調査研究

愛媛労災病院 産婦人科・働く女性メディカルセンター 宮内文久医師

深夜労働に従事する女性は、月経周期が不規則になる率が高いことがすでにわかっている。そこで、20~40歳までの看護師を対象に、昼間勤務、準夜勤務、深夜勤務それぞれの場合の、ストレスに関連するホルモン濃度等を測定。視床下部・下垂体・卵巣系、視床下部・下垂体・副腎皮質系、交感神経・副腎髄質系に及ぼす影響を検討した。同時にアンケートを行い、仕事後の疲労感や満足感などの回答を得た。

結果から、夜間に光を浴びて働くと睡眠覚醒のリズムが崩れ、内分泌環境の乱れが生じる可能性があることが示唆された。また、アンケート調査では、昼間勤務に比べ、準夜勤務、深夜勤務と労働時間が夜間にずれ込むにつれ、勤務後の疲労感が増加し、仕事に対する満足度、食欲、「次の仕事に対する意欲」も低下傾向を示すことがわかった。

この研究データは、労災病院に勤務する看護師の方々の献身的な協力によって得られた貴重なものである。今後さらに研究を重ね、国内、国外への発信を目指したい。